

子どもの興味と表現を引き出す劇への取り組み

千田恭子 河合重紀

子どもの興味と表現を引き出す劇への取り組み

千田恭子¹ 河合亜紀²

The Initiative to Play that Draws Out Children's Interest and Expression

Kyouko SENDA, Aki KAWAI

概要

行事で劇を行う場合、保育者が保護者の眼を意識し最終的な出来上りを気にするあまり、子どもが主体となって劇に参加するのではなく「やらされている」場面を目にすることがある。本来は、日常生活における子ども一人ひとりの発達過程を見通し理解するとともに、行事を通して発達を促し、興味・関心を引き出すことによって「主体的に楽しく」参加できるようにすることが大切であろう。今回の取り組みでは、日々の生活と関連付け、自分だけの台本を手渡し管理させることにより劇への期待感を持たせることができ、そこから自然発生的に劇遊びへの展開が生まれた。劇に関する様々なことについて話し合う機会を作ることによって、友達の意見を聞き合う姿が見られ、より豊かな表現も生まれた。さらに、発表会終了後には、友達の取り組みを褒め合い、皆で作上げた達成感を味わうことによってクラス内の結束がより強くなったと感じる事ができた。

キーワード：行事、劇、表現、興味、主体性

Keywords：Event, Play, Expression, Interest, Individuality

I. はじめに

幼児教育・保育の現場において、劇もしくは劇遊びと称される活動は発表会やクリスマス会などの年間計画に組み込まれることが多い。また、子どもの日常生活で行われている「ごっこ遊び」も、劇もしくは劇遊びの一種であるだろう。登場人物になりきり、周りの子どもと協調して遊ぶ姿は、すべての幼児教育・保育の現場で毎日のように見られる光景である。しかし、「ごっこ遊び」を楽しんでいる子どもであっても、行事として劇もしくは劇遊びを行う場合は保育者の環境設定や導入方法によって明暗が分かれることがある。

幼稚園教育要領（2018）では第1章 第4節 3 指導計画の作成上の留意事項（5）において、『行事の指導にあたっては、幼稚園生活の自然の流れの中で生活に変化や潤いを与え、幼児が主体的に楽しく活動できるようにすること。なお、それぞれの行事についてはその教育的価値を十分検討し、適切なものを精選し、幼児の負担にならないようにすること。』と記載されている。さらに『その指導にあたっては、幼児が行事に期待感をもち、主体的に取り組んで、喜びや感動、さらには、達成感を味わうことができるように配慮する必要がある』とも書かれている。

保育所保育指針（2018）では特別に行事を取り扱っている箇所はないが、第1章 3 保育の計画及び評価（2）

指導計画の作成において、ア『保育所は、全体的な計画に基づき、具体的な保育が適切に展開されるよう、子どもの生活や発達を見通した長期的な指導計画と、それに関連しながら、より具体的な子どもの日々の生活に即した短期的な指導計画を作成しなければならない。』と記載されている。また、イでは『指導計画の作成にあたっては、第2章及びその他の関連する章に示された事項のほか、子ども一人一人の発達過程や状況を十分に踏まえるとともに、次の事項に留意しなければならない。』とあり、『(イ) 3歳以上児については、個の成長と、子ども相互の関係や共同的な活動が促されるよう配慮する事。』と書かれている。幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説（2018）も、ほぼ同様の内容である。

これらのことから、行事を考える際には、日々の日常生活における子ども一人ひとりの発達過程を見通し理解するとともに、行事を通して発達を促すことが大切であり、子どもの日常生活の中から行事への興味・関心を引き出すことによって、『主体的に楽しく』行事に参加することができる。また同時に、保育者が保護者の目を意識し、最終的な出来上りを気にして、子どもに「やらせる」ことは避けるべきことであろう。

ここで注意しなくてはならないのは個別配慮が必要な、いわゆる「気になる子ども」である。津田・木村(2014)は「気になる子ども」を『発達障害等の診断の有無に関わらず保育をする上で保育士が困難感を感じたり、行動

¹ 富山大学人間発達科学部 ² 社会福祉法人 春献美会 おおくらやまえきまえ のぞみ保育園

や反応が気になる子ども、また保護者が育てにくさを訴える子ども』と定義している。また、小林（2015）が全国の認可保育所約2,400施設に対して行ったアンケート調査では、回答のあった保育所の9割以上に、いわゆる「気になる子ども」がいる状況であることが明らかになっている。保育所ほどではないにしろ、幼稚園や認定こども園においても「気になる子ども」が増加傾向にあることは容易に想像することができる。劇を上演するクラスに「気になる子ども」がいる場合は通常より指導に時間がかかり、まとめ上げるためには大変な労力を要するであろう。しかしながら、劇もしくは劇遊びは、どのような役になろうと全員が主役であり、「気になる子ども」がいるいないにかかわらず、演じ作り上げていく過程で、お互いを認め合う気持ちや励まし合う心など、子どもは多くのことを学ぶことができると考える。

上記のことをもとに、幼稚園教育要領（2018）に書かれているように、『幼児が行事に期待感をもち、主体的に取り組んで、喜びや感動、さらには、達成感を味わう』ことができるよう、子どもの日常生活に寄り添いながら、子どもの動きや感情の表現を促し、クラス演劇を楽しむための劇への取り組みを行い、指導方法についての検討と考察を行った。

Ⅱ. 方法

1. 対象

神奈川県、N保育園の4歳児クラスを対象とした。

クラスは13人で、個別配慮が必要な子どもが複数人在席する。

2. 期間と方法

平成30年8月から12月

子どもの日常と、劇の練習中の様子を観察。

3. 月ごとの活動の様子と考察

(1) 8月（題材の選択）

劇の上演は12月に行われる生活発表会という恒例の園の行事である。劇の他にも合奏や合唱に取り組んでいる。題材の選択に際し心がけたことは以下の点である。

- ・上演時間が10分～15分程度。
内容そのものは5分程度が目安となる。
- ・台詞が少ない、もしくは繰り返しが多い。
- ・登場人物が多い、あるいは場面が多く、複数の子どもで役を交替できる。
- ・行事の遠足で動物園に行くため、動物が関係する作品が望ましい。

既存の物語や絵本では該当する作品が見つからなかったため、富山県のB大学で行われている保育士養成のための実践演習授業において、学生が創作したいくつかの

紙芝居を調べたところ、子どもが興味を持ちそうな話があったので検討することにした。その中に、子狸が主人公の作品があった。変身しながら困っている動物たちを助けていくのだが、最後は自分が困難にぶつかり、他の動物たちに助けてもらう内容である。制作した学生は内容にふさわしいBGMも工夫し、近隣の幼稚園や保育所で実践を行っていた。既に述べた条件に当てはまることに加え、「助け合い」「協調」などのテーマがあり、クラスの子どもも共感しやすい内容であると考えたため、その紙芝居を劇にアレンジすることにした。その際、使用する物は台本のみとし、BGMは劇の進行に合わせて新たに作ることにした。

(2) 9月（導入と鑑賞）

作品は大きく6つの場面に分けることができる。（本来ならば台本を載せるべきだが、授業の一環として学生が作成したものである為、今回は省略する。）各場面は以下の通り。

- ①子狸（名前は【ぼんた】。以下【ぼんた】とする。）が変身に必要な木の葉を手に入れる話。
- ②風船を木の枝に引っかけてしまった子兎との話。
- ③狼に襲われている3匹の子豚との話。
- ④大きな荷物が持てなくて困っている老いた雌山羊との話。
- ⑤大切な花畑の花を枯らしてしまった老いた雄山羊との話。
- ⑥変身した姿から戻れなくなった【ぼんた】自身の話。

生活発表会の劇に使用する話だということを子どもに最初から伝えることは避け、日々の保育の中で内容を場面ごとに切り分け、小出しに素話を行った。そうすることにより話の流れを捉えやすくし、内容に興味を持てるようになると思ったからである。また、言葉の意味やイメージを想像することが難しい場合には、身振りや表情をつけたり、簡単な言葉に置き換えて話したりするように心がけた。

遠足で動物園に行ったことが影響しているのか、子どもは多くの動物が出てくる話を興味深く聞いており、次の展開を催促し、楽しみにしている様子が見られた。それぞれの場面で【ぼんた】が何に変身するのか、どのような出来事と遭遇するのかが気になったのだと考えられる。

(3) 10月（内容の理解と鑑賞）

場面ごとの話を繰り返すことにより、各内容を楽しんでいることが感じ取れたので、話の展開をひとつなぎに追っていけるよう、素読みではなくパネルシアターを使用した読み聞かせに移行した。【ぼんた】が誰から木の葉を貰ったのか、どのような順序で他の動物と出会ったのか、変身した動物の種類などを、視覚を通して話の展

開を追うことで理解が深まったと考える。興味や関心が持てない子どもがいる時は、無理に活動に参加させずに子どものペースを優先させ、興味を持てたことが一つでもあった時には褒めるようにした。

子どもが全体の展開を理解した頃、この話が生活発表会で行う劇だということを伝え、一人ひとりに台本（担任が挿絵を描いたもの）を用意して手渡した。なお、話の進行において、子どもが分かりにくいだろうと判断したところは、今回限りだということで、台本に台詞を追加したり削除したりした。台本の表紙は白紙にしておき、話のなかで印象に残ったシーンをを選び自由に絵を描かせた。出来上がった表紙はまさに十人十色で個性が光っており、どのような事に興味を持ったのかが一目でわかった。また、出来上がった台本は「自分だけの物」という特別感や大切に扱う気持ちを持たせ、子どもがいつでも読めるようにするため各自で管理させた。この試みを子どもはとても喜び、モチベーションを上げるきっかけとなった。その結果、自由遊びや空いた時間に台本を出してきて音読したり、先生役になりきって友達に読み聞かせをしたりする子がいた。「お家に持って帰っていい？」と尋ねに来る子もいた。

担任は上記と平行してBGMの構想を始めることにした。以下に挙げるような、場面が切り替わるシーンや場面にあったBGMをつくり、聴覚的にも行動に結びつけやすくなるように考えたが、劇の練習を重ねていく間に増減は不可避であることは予想の範囲である。

- ①【ぼんた】が歩く（場面転換）
- ②変身の音、枯れた花畑が満開になる
- ③不穏な音（狼のシーン）
- ④悲しそうな音（花が枯れて嘆く、元の姿に戻れなくて悲しむ）

（4）11月（イメージ作り）

理解した話の内容を基に、友達と一緒に役になりきって遊んだり、イメージを膨らませたりしながら台詞や動きを考えたと。その際、劇遊びについて、じっくり話したり、遊んだり、道具を使ったりできるような時間を確保し、事前に話に関連する小道具や素材、材料を用意することで、劇遊びに必要な道具を相談しながら作る事を楽しんだ。それとともに、決まった役を演じるのではなく、様々な役になりきって遊ばせるようにした。そうすることで、それぞれの役の良さに気づくことや、共感できる物事を見つけることができた。

また、話の中にある繰り返しの言葉を楽しんだり、語感を味わったりできるようにした。実際、子どもは「ぼくに まかせて」「しっぽを ぎゅ」などの繰り返し出てくる言葉を、日常生活をする中で場面に合った使い方を理解して使うようになった。特に、「ぼくに まかせて」を遊びの中で使用したときには、周りの子どもから「ぼ

んたくんみたい」と言われていた。「ぼぼんのぼん」という変身の呪文に関しては、子どもにとって言いにくい言葉だったのか、劇遊びをしている間に「ぼぼのぼん」に変化していった。一緒に劇遊びをすることで、子ども同士にコミュニケーションが生まれ、表現する楽しさを共有できたようだ。さらには、気が進まない事に挑戦する勇氣、誰かのためを思って行動する喜びを感じるなどが、子どもの日々の生活に見られるようになった。

様々な役になりきって遊んだ後、配役を決める作業に移った。まず、子どもに演じてみたい役が何かを聞いたところ、意外にも、希望する役が【ぼんた】に集中する事態を避けることができた。この事実から、自らの言語活動について、得手不得手を認識している子どもが多かったのではないかと予想ができる。3歳以上児は目的を持って行動できるようになるが、反面、自分の行動や結果を予測して不安になったりする。特に個別配慮が必要な子どもの中には言語活動に不安を持っている子どももおり、中心的な役柄を演じたいとは思わなかったのであろう。演劇である以上、配役によって台詞の量に差がでてくるが、その差は、ナレーションの部分をクラス全員に交替で担当させることで調節することができた。また、登場する動物の中で唯一の悪役である狼役を選ぶときには慎重を要した。大切な役であることを子どもにも納得させ、衣装に特別な趣向を凝らすなどして、子ども自身がやる気になるように配慮した。

一人で台詞を言うことが恥ずかしい子や不安な子の配役については、安心して取り組める友達と一緒に発表したり、演じたりできるようにし、少しずつ自信をつけられるようにした。また、ストレスに感じない程度に繰り返し台詞を練習する活動を行った。達成感を感じられるよう、日々ひとつは具体的に褒め、気持ちに共感するよう心がけた。さらに、家庭にも園での取り組みや、本児の頑張る姿を伝え、活動によりストレスを抱えやすい本児の置かれた状況も合わせて説明し、理解を得られるようにした。

（5）12月（思いを伝える、気付く、受け止める）

11月の段階でイメージ作りは始めていたが、12月に入り、話の内容から各自が感じたことや考えたことをクラスの友達と共有したり発表したりできる場を設け、発表したことを認め合えるようにしながら、イメージから台詞や動きを一緒に考えて表現するような取り組みを行い、並行して、これまでに製作活動で体験した経験を元に、子ども達に大道具や小道具のイメージを話し合いながら考えさせた。出し合った考えは保育士が理解しやすいように整理し、表現活動に繋げていくように動きや歌を付けるなどを行うとともに、劇に必要な素材や道具を選ばせ、協力して製作にあたった。

また、台詞だけでは間が持たないところが明らかになってきたので、音楽の力を借りることとし、新たに以

下のBGMが必要だと考えた。

- ⑤オープニング
- ⑥変身している間の音
- ⑦変身完了の合図
- ⑧町中の動物が出て来る音
- ⑨元の姿に戻れた音
- ⑩エンディング

変身のための衣装替えには、考えるポーズをしながら「何に変身しようかな」という掛け声を取り入れたが、必要な時間が読めないで、このシーンだけは生演奏とし、着替え終了後に、別の保育士に音で合図をしてもらうようにした。

BGMは①③④⑤⑥⑩は曲として、それ以外は効果音として担任が作成した。

各場面でのイメージは多くの音色を必要としたが、効果音や曲を電子ピアノで演奏することで問題を解消した。演奏した音源を、スマートフォンにダウンロードした音楽アプリを使用して録音し、パソコンに取り込み、CDに書き込んだ。演者やナレーターが入れ替わる時や変身する時などは、毎回音源を同じにして混乱がないようにし、劇全体として曲の種類が多くならないよう心掛けた。

個別配慮が必要な子どもたちは環境の変化に敏感である。生活発表会が近づき緊張している子どもには、友達と一緒に台詞を発表したり、動きや立ち位置が分かりやすいように、身振り手振りや印をつけるなどして、視覚的に理解しやすいよう配慮をした。また、失敗してしまうと自己嫌悪になったり、周りから責められがちであるため、孤立しないように「皆で頑張っているんだよね」「だいじょうぶ！」と日ごろから言葉で伝え、友達が台詞や立ち位置を誤ってしまっても、見守ったり互いに助け合うことで、協力して物事を上げる楽しみを見出せるようにした。さらに、本番の環境に慣れるよう、舞台での予行練習で大勢の職員に見てもらいながら、立ち位置や声の大きさを体感し、経験を積む機会を作るなどの配慮を行った。

環境に慣れてくると、緊張感がなくなり、メリハリにかけることがあったので、集中が切れた時は活動を取り止め、他の活動で発散したり、他クラスの発表を鑑賞したりして、気持のリフレッシュを図った。また、保育室では出来ていたことも、舞台や人前での発表となると、緊張から思うように出来なかったと感じてしまい、自信がない表情になる事もあったが、生活や日々の活動の中で培ってきた力を振り返り、具体的に伝えたことで、子ども自身が「やってみたい」と意欲を見せた。

(6) まとめ

生活発表会の練習を始めてから終えるまでを振り返ると、子どもが様々な成長をした事がわかる。練習中には

友達との話し合いの中で、自分が認められる、共感してもらおうなどの経験を積むことで自己肯定感が強まり、消極的だったことに対して、やってみようとする気持ちが高まったようだ。また予行練習から当日にかけては、友達の頑張っている姿を見て嬉しそうな表情をする、立ち位置を間違えていた友達に正しい位置を教える、集中力が切れそうな時には近くにいる誰かがリードをする、台詞がなかなか出てこないときには台詞を教えるなど、様々な姿を見ることができた。そして、発表会終了後には、ビデオに撮った自分たちの発表を鑑賞し、友達の取り組みを褒め合い、皆で作上げた達成感を味わうことによってクラス内の結束がより強くなったと感じる事ができた。劇の上演のから8ヶ月が過ぎた今でも、子どもが劇中の台詞を日常生活の中で使用しているのを耳にする。この劇を上演できて非常に喜んでおり、満足しているからだと考えられる。

客席の様子としては、3匹の子豚の兄弟と狼の場面では、「あ、〈3匹の子ぶた〉に似てる」と声上がるなど、劇を観ている子どもも楽しんでいる様子が窺えた。そのことから、行事で行う劇は、観ている子どもも楽しめなければいけないことを再確認した。話の内容に共感して楽しめれば、子どもは自然に発話をする。劇の終盤、象になって元の姿に戻れなくなった【ぼんた】のしっぽを町中の動物たちで引っ張る場面で、クラス全員で引っ張ることができるように、しっぽを長くして綱引きのように演出したのだが、〈おおきなかぶ〉のように、誰かが誰かを引っ張るとい形にすれば、観ている子どもの反応はさらに良くなったかもしれないと考えている。

Ⅳ. おわりに

今回、劇の準備を進めていくにあたり、『幼児が行事に期待感をもち、主体的に取り組んで、喜びや感動、さらには、達成感を味わう』ためには、行事は子どもの日常生活で独立したものではないということを再認識した上で指導計画を作ることが不可欠であると考え、①保育と関連づけること ②行事を通して発達を促すこと ③子どもの姿に沿ったねらいと内容を作ることの3点に留意した。

ねらいは「物語の内容に親しみ、協力すること、思いやる優しさ、素晴らしさを共感する。」とし、クラスに個別配慮が必要な子どもがいるという状況も考慮し、10月末から準備期間に入れるよう約1ヶ月半の導入期間を設けた。

遠足で動物園へ行き、動物に親近感を持ったことにより、場面ごとに分けた素話の内容を興味深く聞き、展開を楽しみにする姿が見られ、誰がどの動物に興味があるのか、どの場面が好きなのかななどを観察していくとともに、自分だけの台本を手渡し、表紙を書かせ、管理させることにより、劇への期待感を持たせることができ、そ

こから自然発生的に劇遊びへの展開が生まれた。十分に劇遊びを楽しむ中で、必要な小道具や内容・動きについて話し合う機会を作ることによって、友達の見聞き合う姿が見られるようになった。配役を決める頃には、子ども自身の気持ちがあっさり出来上がっていたと言えるだろう。自分ひとりでは不安な子どもも、友達と一緒になら大丈夫かもしれないという小さな自信もみえてくるようになり、発表会を終えたときには大きな満足感を覚え、その後も発話が多くなるなど、少しずつ積極的になっている姿が見て取れるようになった。

勿論、これらの取り組みを行うには保護者の方々の協力が必要不可欠であった。子どもが台詞を覚える時に、一緒に台本を読むなどをして時間を割いて頂いたり、自宅での何気ない会話の中で発せられる、劇に対する子どもの本音を教えて頂いたりすることで信頼関係を築くことができた。発表会が終了した後も、子どもの様子を教えて頂いている。行事は保護者に子どもの生活や発達を理解してもらう事ができる良い機会になる。そのためにも、コミュニケーションをとることの重要性も再確認できた。

劇もしくは劇遊びには、子どもの発達の側面をまとめた5領域すべてのねらい及び内容が含まれていると考える。幼児の発達の一つの側面から見るとはならず総合的なものとされているが、行事として行われる活動の中で、多面的に子どもの発達を捉えることのできるものの一つだと言えるだろう。さらに、5領域におけるねらい及び内容に基づく活動によって育まれた子どもの資質・能力がどのように伸びているかを示す「幼児期の終わりまでに育って欲しい姿」の(3)共同性、(4)道徳性・規範意識の芽生え、(5)社会生活とのかかわり、(6)思考力の芽生え、(9)ことばにとる伝え合い、(10)豊かな感性と表現、などを念頭に置いて、長期的な成長を見守ることができるものでもある。劇もしくは劇遊びは、日常の保育への導入から当日までの実践を確実に行うことで、子どもの興味・関心を引き出し、協働して表現することを通して他者の表現を受け止め共感し、新たな表現を生むための小さな変化をもたらすことができると言えるだろう。

謝辞

本実践のために多大なご協力を頂きました、社会福祉法人 春献美会 おおくらやまえきまえ のぞみ保育園の保護者の皆様、職員の皆様に心より感謝を申し上げます。

引用・参考文献

- ・小林芳文 2015、『いわゆる「気になる子」や障害児等の受け入れや支援に関する保育所の現状と課題（アンケート・ヒヤリング調査の結果から）』、「保育所における障害児やいわゆる「気になる子」等の受け入れ実態、障害児保育等のその支援の内容、居宅訪問型保育の利用実態に関する調査研究報告書」、p.109-120、社会福祉法人日本保育協会
- ・津田朗子・木村留美子 2014、『保育所における発達障害の早期発見・早期介入を阻害する要因の検討―「気になる子ども」に対する保育士の認識と支援体制から―』p.25-33、金沢大学つるま保健学会誌 Vol.38(2)
- ・厚生労働省 2018、『保育所保育指針解説』、株式会社 フレーベル館
- ・文部科学省 2018、『幼稚園教育要領解説』、株式会社 フレーベル館
- ・内閣府、文部科学省、厚生労働省 2018、『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』、株式会社 フレーベル館
- ・井口 太 2018、『幼児教育における音楽的表現の指導』、「最新・幼児の音楽教育 幼児教育教員・保育士養成のための音楽表現の指導」、p.12-21、井口 太編著、朝日出版社
- ・小川博久 2018、『保育とはどういう営みか』、「最新・幼児の音楽教育 幼児教育教員・保育士養成のための音楽表現の指導」、p.8-11、井口 太編著、朝日出版社
- ・谷田貝公昭（監修）渡辺厚美・岡崎裕美（編著）2018、『音楽表現』コンパクト版 保育内容シリーズ ⑤、株式会社 一藝社

(2019年9月2日受付)

(2019年10月2日受理)

